

平成27年度 スーパーバイザーによる学校教育支援事業報告書

研究テーマ「豊かな心情を育み、たくましく主体的に生きる子どもを育てる ～かかわる力、やりぬく力、考える力を育む授業づくり～」

鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校

スーパーバイザー：金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 武居 渡 教授

1 はじめに

本校では、「聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、豊かな心とたくましく生きる力を育てる」という教育目標を掲げており、その実現に向けて、子どもたちの実態を的確に把握し、保護者や地域の思いや願いを受け止めつつ個々の課題を設定し作成した「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」をもとに、日々の指導を行っている。しかしその取り組みの中で、多様な考えを尊重し、自己の意見を正確に伝えながら様々なコミュニケーションを図る力や、自らの課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断して行動する力が、まだ十分に高まっていないことが課題として考えられている。

そこで本年度は、目指す子どもの姿とつきたい力を明確にし、キャリア教育段階表をもとに子どもの発達段階を見通した実践を教育活動全般で進めていけば、伝え合い、学び合いながら課題を解決していこうとする主体的な子どもを育てることができるであろうと考え、上記の研究テーマを設定した。ケース検討会や学部研究を通して、子どもの実態把握と課題、具体的な支援の方策について共通理解を図り、教育実践につなげていく。そしてその実践を評価し、次への課題や活動に活かしていくサイクルを繰り返すことで、キャリア教育の視点を取り入れた教育活動、すなわち「かかわる力、やりぬく力、考える力」を育む授業づくりができるよう、各学部の実態に合わせて工夫、実践していった。

2 研究方法

(1) キャリア教育段階表をより効果的に教育実践に活用できるよう見直しを図る。

(平成26～27年度)

(2) キャリア教育段階表を活用して、現状、課題、目指す姿を明確にし、支援の方法や具体的な活動について検討する。(ケース検討会の実施)

3 研究内容

(1) キャリア教育段階表の見直し

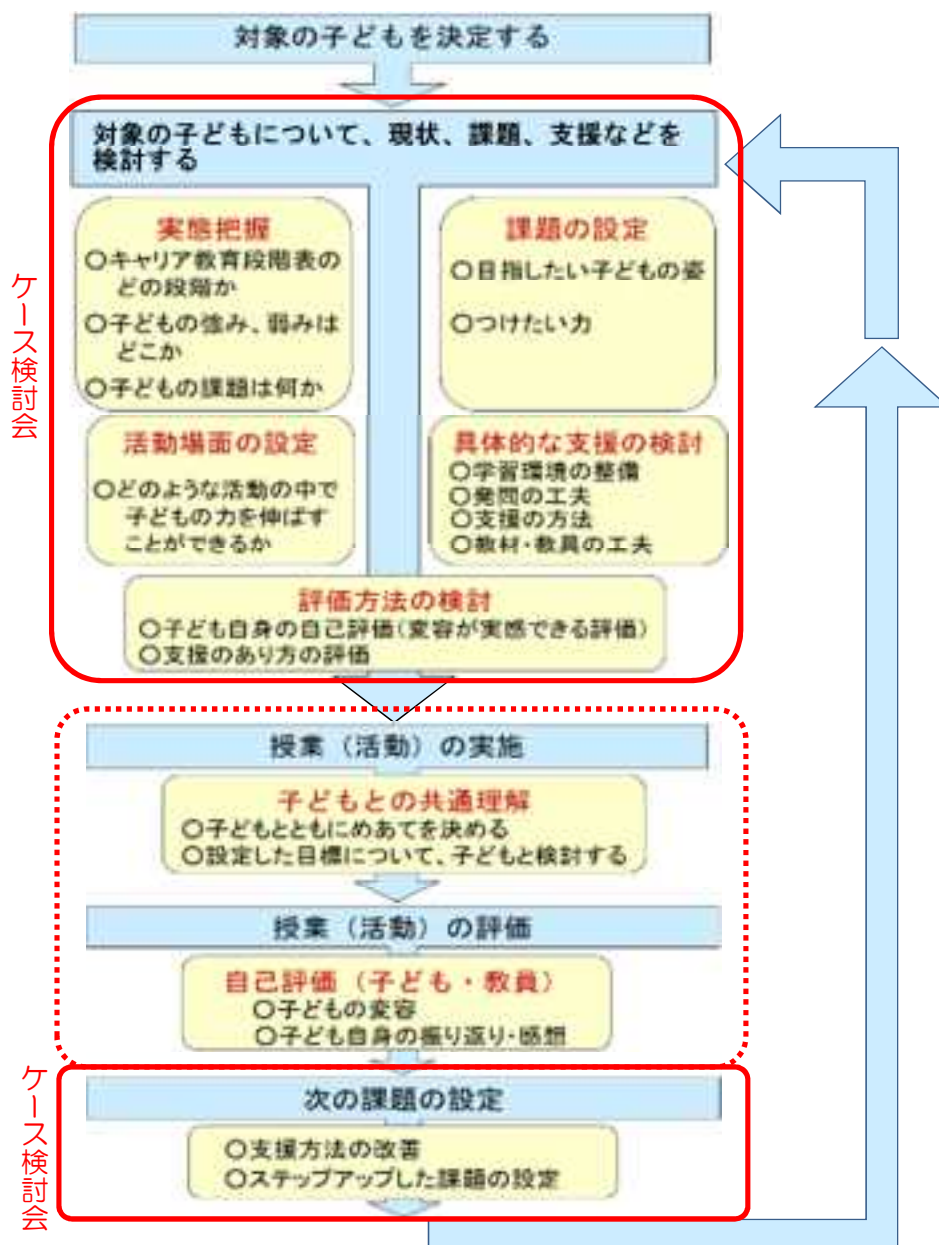
平成23年度にキャリア教育全体計画とキャリア教育段階表を作成し、幼稚部から中学部まで系統だったキャリア教育を推進してきたが、学部間や人権教育年間指導計画との整合性がとれていない箇所が見られたため、各学部での話し合いや他学部との合同会議などを開き修正を行った。

さらに、キャリア教育段階表をより効果的に活用するために様式や目標の見直しも行った(学期ごとの記録欄、活動場面の記入欄の新設)。また、目標については聴覚障がい児のキャリア教育という視点から、自立活動指導プログラムとリンクさせ、項目を追加した。

(2) キャリア教育段階表を活用した研究の取り組み

キャリア教育段階表を活用して、幼児・児童・生徒の現状、課題、めざす姿を明確にし、支援の方法や具体的な活動について検討していった。月に1回程度、基本的には職員研修の日に学部ごとに進めていった。

【ケース検討会の流れ】



≪ 幼稚部 ≫

① 幼稚部のキャリア教育と「かかわる力」のとらえ

幼児期は遊びや生活を通して、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度・基本的生活習慣など、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる重要な時期である。小中学部でのキャリア発達を支える土台となる力をつけるために、日々の生活の中で様々な能力が身につくことをねらっている。

本研究では、キャリア教育の中でも幼稚部の研究テーマである「かかわる力を育む」ことに焦点を当て研究を進めた。そして幼稚部における「かかわる力」のねらいとその内容についてまとめた。

ひまわり分校幼稚部「かかわる力」ねらい (○) 内容 (・)		
3歳児	4歳児	5歳児
○教師や身近な人に自分の気持ちを受けとめてもらい、愛情や信頼感を持つ。 ・教師や友達と一緒にいることや一緒に活動することを喜ぶ。 ○友達とかかわって遊ぶことを楽しむ。 ・いろいろな遊びの中で、教師と一緒にになって友達と遊ぶことを楽しむ。 ○日常生活や遊びの中で、教師や身近な人を通して簡単な約束やきまりを知る。 ・身近な人の働きかけを通して、自分の気持ちを相手に伝え、待つことや交代することなどを身につける。 ・簡単なルールのある遊びを楽しむ。	○友達とのつながりを助け、集団で行動することを楽しむ。 ・自分のやりたい遊びを見つけ、教師や友達と楽しんで遊ぶ。 ○教師や友達など身近な人に対する愛情や信頼感を深め、すすんでかかわろうとする。 ・身近な人の支援を受けて、難しいことでもがんばって取り組む。 ○日常生活や遊びの中で約束やきまりがだいたいわかり、守ろうとする。 ・友達とのかかわりを深め、思いやりを持つ。 ・当番する順序や仕事の内容がわかり、よろこんで行う。	○自分の力で行動することの充実感を味わう。 ・自分の力で行動することに自信をもつと共に、難しいことにも自ら挑戦しやりとげることでの充実感をもつ。 ・友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 ○友達と積極的に関わりながら、喜びや悲しみを共感しあう。 ・友達を励ましたり、一緒に喜んだり悲しんだりして、友達と積極的にかかわりながら共感しあう。 ○社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。 ・友達と誘い合って簡単なルールのあるいろいろな遊びを楽しむ、ある程度のトラブルは自分で解決しようとする。

②ケース検討会の実施

- ・様々な視点から意見が出るように、幼稚部教員だけでなく、日ごろからかかわることの多い地域支援部教員も交えてケース検討会を行った。
- ・月ごとの保育計画に関する保護者との懇談や送迎時の会話の中から、幼児の様子やちょっとした変化をとらえて、支援の工夫に生かした。

③教師の支援

- ・家庭でのやりとりのきっかけとなるよう、その日の活動の様子を写真日記にして保護者に渡している。写真日記には、主になかよしあそびの活動場面にひらがなと指文字で簡単な文を添えている。
- ・掲示物にはひらがなや指文字をつけて、生活の中でふれる機会が多くなるようにした。また、指文字積み木を教室に置き、自分で文字を組み立ててことば作りができるようになった。
- ・ことばや主体性を育てるために、幼児と誰かがやりとりをするときや幼児が何かしようとしているときは、教師がすぐに介入するのではなく、待ってみたり、わざと話をそらしたり、見守ったりしている。

・写真日記



学校や家庭でその日の出来事について話し合う

・掲示物などの文字の環境



季節のことばに関連した壁面掲示 行事等の事前事後学習(現在形・過去形)

幼児が自分からことばを発信できる工夫

指文字積み木

≪ 小学部 ≫

① キャリア教育段階表の見直し

キャリア教育段階表のそれぞれの段階に具体的な活動場面（行事・授業等）を組みこんだ。

② ケース検討会の実施

1回のケース検討会につき児童を2名選定し、それぞれの児童について話し合った。検討会では、子どもの現状、課題、目指す姿を共通理解して、具体的な支援方法や評価方法等について話し合い、各グループで出た意見や方向性を学部全体で共有するようにした。検討したねらいや支援方法をもとに授業や活動を設定し、児童とともに活動のめあてを決めながら実践した。実践後は、児童と一緒に活動について振り返り、ケース検討会で活動の在り方や児童の変容、今後の支援の仕方について協議して、今後の課題を明らかにした。



③ 日々の実践

- ・ キャリア教育のねらいを組みこんだ授業や活動の実施
- ・ 指導案にキャリア教育のねらい及び評価も設定した一人一研究授業
- ・ 運動能力や社会性を高めることをねらった昼の休憩「なかよしタイム」の実施。（週1回）
- ・ 居住地校や近隣の小学校との交流及び共同学習



≪ 中学部 ≫

① ケース検討会の実施

- ・ 学部の教員で、キャリア教育段階表をもとに視点を絞って一人ずつケース検討会を行った。
- ・ 各教科の様子、普段の生活から、前年度までの様子など、各教員それぞれの視点から生徒の強みと弱みを挙げ、支援方法を整理した。(図1)



- ・ 共通理解を図った上で、実践→振り返り→修正して実践をしている。

(図1)

イ.自己理解・自己管理能力 エ.キャリアプランニング能力 (名前)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の一員としての役割を自覚し、協調性のある行動をとろうとする。 ・ 自らの課題を見だし、計画的に解決していこうとする。 ・ 自己の障がいや弱さを認識して説明する力や自己主張力を高め、協調性のある行動をとろうとする。 ・ 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 ・ 自分のつきたい職業を考え、必要な情報を収集しようとする。 ・ 聴覚障がいのある先輩たちの生き方から学び、将来の自分について展望を持つ。 	
強み	弱み
<ul style="list-style-type: none"> ・ 協調性OK。周りに気を遣いながら行動できる。 ・ 他者の気持ちを考えて行動できる。 ・ 素直である。 ・ することがわかると工夫して自発的に行動したり、事前に準備して事に臨んだりすることができる。 ・ 自分の課題は何か、どう対処するのか考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の課題を教師と一緒に考え、何かをしないといけないことはわかっているが、どう行動してよいのか自信がもちにくい。 ・ 初めてのことが苦手。 ・ 情報の整理が苦手。視覚的な支援を用いながら丁寧に支援していかないと、情報が混乱してしまいがち。 ・ 環境的に対人関係が広がりにくい(ひまわりと家庭)。
支援方法	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 困ったときや課題への対処法を知る。→日々の授業や生活の中で教師がモデルとなったり、問いかけたりしながら、自分でやり過ごせる術を身に付けさせたい。 ・ 視覚的な支援→板書、文字、図示、写真、イラスト、動画など、見てわかる支援や見える形で残していく。 ・ 課題や具体的な対処法を教師と一緒に相談しながら焦点化して、評価を含め紙1枚程度にまとめていく。 ・ できていることを多方面からほめる(評価言も含め)。 	

② 「振り返りシート」の作成と活用

- ・ ケース検討会で話し合ったことを踏まえて個別に作成した。
- ・ 生徒に提示し、内容や活用することの意味について共通理解を図った。
- ・ 各教科や行事等で活用。活動前に目標を設定し、活動後に振り返りを行う。自己評価だけでなく教員からの評価(数値、コメント)も記載した。

	内容	自分	教員
かかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分から相手に話しかけ、人間関係を築き上げようとする。 ・ 相手の話していることがわからない時、聞き返して確認 		
見つめる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の一員としての役割を自覚し、協調性のある行動をとろうとする。 ・ 自己の障害や弱さを認識し、説明する力や自己主張力を高め、協調性のある行動をとろうとする。 ・ 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 ・ 自分のつきたい職業を考え、必要な情報を収集しようとする。 ・ 聴覚障がいのある先輩たちの生き方から学び、将来の自分について展望を持つ。 	3	4
やりぬ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題 [] に対して、自分自身で考え、解決しようとする。 ・ 課題 [] に対して、自分自身で考え、解決しようとする。 		

4 スーパーバイザーによる指導助言

金沢大学人間社会研究域学校教育系の武居 渡教授に年間3回来校いただき、校内研究への指導助言や講演をいただいた。(内1回は、「特別支援学校ネットワーク構築事業キャリア教育公開研究会」の指導助言及び講演)

(1) 校内研究への指導助言

ケース検討会を中心とした各学部の研究に関して、その研究方法や研究の方向性(着地点)、まとめ方等についてのご指導をいただいた。

- ・「今のこの子の先に何があって、前に何をしてきたかが意識できる」のがキャリア教育段階表である。
- ・「かかわる力」を育むために、教員がどのように環境を設定していくか。
- ・「教科の目標」と「教科の向こう側にある目標(キャリアの目標)」をもって教科指導にあたる。
- ・自己評価では、なぜそのような評価をつけたのか「自己を語る」機会をもつことが大切である。

(2) 講演

「ろう学校におけるキャリア教育のあり方」

- ・聴覚障がい児が「合理的配慮」を受けるために、聾学校としてすべきことは、自分自身がどう配慮してほしいかを他者に説明できる力を育てていくこと、社会にそれを理解してもらえるように発信していくことである。
- ・発達段階をふまえたキャリア教育…①分かり合えるコミュニケーションと他者への信頼感
②高い学力と言語力
③障がい認識と自己実現
- ・幼児期・小学部で考えるべき障がい認識…きこえる人ときこえない人の共通点と相違点
きこえない自分に自信をもつ。
- ・中学部・高等部で考えるべき障がい認識…ろう者としての自信と誇り
「社会性」ではなく「社会力」をつける。

「高い言語力と学力をつけるために ～トップダウンとボトムアップの指導～」

FAX、メール、インターネットなどの科学技術の進歩により、日本語の読み書きの力があれば、従来では考えられなかった多くの情報を聴覚障がい者も手に入れることができるようになった。しかし、日本語の読み書きができて、

・その情報が本当に正しいか ・情報をどう解釈し使うか ・既存の知識とどう融合するか
の、メディア・リテラシーが欠かせない。

読解的側面(ボトムアップ的側面)、批判的読みの側面(トップダウン的側面)の両方からのアプローチによる言語指導が必要である。

- ・リライト文 ・手話で話をつかむ(手話ビデオの活用)
- ・音韻レベルの指導(しりとり、なぞなぞ、言葉集めなど)
- ・語彙レベルの指導(短冊、掲示物、ワードマッピングなど)
- ・形態・統語レベルの指導(自動詞と他動詞、用言の活用、助詞など)



5 研究のまとめ

(1) 成果

各学部がそれぞれの幼児、児童、生徒の実態に合わせた方法でケース検討会を行ってきたが、共通して挙げられる成果は、学部内で共通理解を図りながら一貫した指導ができた点である。「ケース検討会の内容を月毎の保育計画に反映させたことで、学校と家庭で一貫性のある支援をすることができ、幼児の変容が見えやすかった。(幼)」「児童をさまざまな視点からとらえることができた。また、活動のめあてを児童とともに考え、児童自らが評価する時間を設けたことで、児童がより主体的に活動に取り組み、次の課題を自ら見つけ出そうとする姿が見られるようになった。

(小)」「自己評価と教員の評価の両方を記載することによって、いろいろな視点で自分自身の良かった点と課題を見つめることができるようになってきた。(中)」など、それぞれの取り組みに合わせて、幼児、児童、生徒の変容や成長を見ることができた。

(2) 課題

キャリア教育段階表を活用した取り組みをしてきたことで、段階表を様々な教育活動の中に活かしていこうとする意識は高まってきたが、活用場面に偏りが見られる、教科指導の中になかなか活かしていないなどの課題も見られた。また、「自己理解・自己管理能力」や「課題対応能力」など、少しずつ成長は見られるが、まだ十分ではない実態が多く見られる。

6 おわりに

研究を進める中で、子どもたちは年度当初に比べ、自分に必要な力を自覚して課題の解決に向けて継続して取り組んだり、自分ができるようになったことを実感したりすることができてきている。しかし、前述のような課題もあり、それらの課題を克服するために以下のことに取り組んでいきたい。

- ・自己理解・自己管理能力を高めるような思考活動をいろいろな場面で仕組んでいく。
- ・多様な経験の場を設定し、子どもたち同士で試行錯誤しながら取り組めるような場面や時間を作って、適切な支援を見極めながら指導にあたる。
- ・子ども自身が自分の意見で目標を決めることができるように、具体的かつ簡潔な問いかけをしていき、考える力をより深めていく。

子どもたちに対する評価はすなわち教師自身の指導に対する評価であるということを常に意識しながら、今後も実践を積み重ねていきたい。